

一八八五年十月二十七日(火)

聖ラーマクリシユナ、シャームプクルの家にて、ナレンドラ、サルカル先生、
ギリシユ・ゴシユたちと楽しい会話

なぜ病に？——ナレンドラに対して出家のための教訓

タクールはシャームプクルの家でナレンドラたちと坐っていらっしやる。午前十時。今日は
一八八五年十月二十七日、火曜日。アッシン黒分四日目、カルティク月十二日。

タクールはナレンドラや校長たちと話しておられる。

ナレンドラ「あの医者は昨日、いったいどうしたのでしょうか」

一人の信者「魚はかかったのですが、糸が切れてしまったという次第です」

聖ラーマクリシユナ「ハッハッハッハ。でも針を呑み込んでいるから、いまに死んで浮いてくるよ」
ナレンドラはちよつと中座して外に出た。すぐ戻ってくるだろう。タクールは校長とプールナのこ
とについてお話になる。

聖ラーマクリシユナ「お前には言うが——皆には聞かせやしないが——プラクリティ(女性的)にな

ると、プルシヤ(神)を抱いてキスしたい、という気持ちになるんだよ」

校長「いろいろな遊びがありますから——。あなた様の場合は病気まで遊びで……。この病気になられてから、また新しい信者たちが次々と来るようになりました」

聖ラーマクリシュナ「プバティが言ってたよ。もし、病気にならないでこんな家を借りていたら、皆は何と言ったでしょう、とね、ハハハハハ。——ところで医者、どうしたらうねえ？」

校長「一方では召使いという気持ちもあって——『私は召使い、あなた(神)はご主人』とも言いますが、またこんなことも言ったりして——『でもなぜ、神を人間に当てはめるのだろうか?』」

聖ラーマクリシュナ「見ていてごらんよ! 今日、医者のところへ行くかい?」

校長「ご容態を報告した方がよければ、参りますが……」

聖ラーマクリシュナ「バンキムというあの少年、どう思う? もしここに来られなければ、お前が行ってここの様子を話してやったらいい。——きっと心が目覚めるよ」(訳註——ここで登場するバンキムは文豪のバンキム・チャンドラ・チョットパッダエとは別の人物)

〔初めに世渡りか? それとも神か?——ケーシヤブとナレンドラへの助言〕

ナレンドラが戻ってきてそばに坐った。ナレンドラは父親の死後、多忙困難をきわめていた。母親と弟たちがいて、彼らを養わなければならなくなったのだ。その上、法律の試験を受けるための勉強もしている。最近、ヴィディヤサーガルの経営するポウバザールの学校で、数ヶ月間教鞭をとって

いた。何らかの方法を講じて、家の経済状態をととのえて、気づかないようにしたいと、ただそればかり気にしてあれこれ努力しているのが現状である。

タクールはナレンドラの境遇を、何もかもよくご存知であった。彼の方をやさしくいたわるように見つめていらつしやる。

聖ラーマクリシュナ〔校長に〕アツチャ、いつかケーシャブ・センにも言ったんだがね——『ヤドリツチャー・バーヴァ（求めずして入ってくるもので満足すべきだ——ギーター 4・22）』だ。貴族の家の息子は自分で食べることの心配をしなくてすむ。毎月、十分な手当が支給されるから。だが、ナレンドラはとても高い霊階に属しているのに、そうならないのはなぜだろうね？ 至聖かみさまに心を全部捧げてしまえば、必要なものは何でも間に合うようにして下さるよ！』

校長「そうでございますとも。きつと、まだその時期ではないのだと思います」

聖ラーマクリシュナ「でも強い離欲が起これば、ゼニ勘定など全くできない筈だ。『うちのことに何の心配もないようにしてやろう。そのあとで修行しよう』——こんな心は、強い離欲の場合は起さない筈だがねえ、ハハハハハ。ある説教師がレクチャーのなかでこんなこと言っていた——『もし一万ルピーあればその利息で食べることが出来るから、何の心配もなく神を求めることができます』と。

ケーシャブもそれに似たようなことを言った。『先生！ ある人が生活に心配のないだけの不動産を持って管理しながら神のことを考えていたとしても——それでよろしいでしょう？ 何も責められ

ることはないでしょう?』

わたしはこう答えたよ——『強い離欲の心が起これば、世間は恐ろしく深い井戸のように見えるし、身内の人間は毒ヘビのように見えてくるものだ。そうなったら、金を貯めよう、土地を管理しようのなどという計算は、夢にも頭に浮かんでこない。神だけが真実在で、ほかのものはみな仮のものだ。——だのに、神のことより俗世間のことを思っているとはね!』

一人の女が大変な悲しみようだ。先ず初めに、自分の鼻輪を外してから落ちないように服のへりに結びつけておいてから、『アア! 何てひどい目に遭ったんでしよう!』そう言つて涙をポロポロこぼしたが、な—に、泣いている間もチャーんと鼻輪が壊れないように気をつけていたのさ!』

みんなは愉快そうに笑つた。

ナレンドラは今しがたのタクルの話聞いていて、矢にでも当たつて倒れるように、そこにごろりと横たわつた。校長は彼の心のうちを見透かして——。

校長(「ナレンドラに) あれ、どうしました? 寝転んだりして! ハハハハ」

聖ラーマクリシュナ(「校長に、笑いながら)——そりゃあ又、『私が身内の義兄にいさんと寝てさえ死ぬほど恥ずかしいのに、知らない男と寝る女たちは、いったいどうしているのかしら?』なんて言うのと同じだね、アハハハハ」

校長自身、世間並みの生活をしているのだから、タクルの今の話を聞いて恥じ入つて当然なのだ。自分のことは棚に上げて、他人(ナレンドラ)のことをあげつらうとは! タクルはこのことをおっ

しゃつたのだ。——一人の女性が夫の兄と不義なことをしているのに、自分のことにはさして気が咎めず、ほかの不道徳な女たちのことばかり批判する。『義兄にいさんは身内の人なのに、それでも死ぬほど恥ずかしい』などと言つて……。

〔物惜ものおしみないのはどんな人？ 自分で稼いだお金や他人にへつらつて貰もらったお金には執着が強い〕
階下したで一人のヴィシユヌ派信者が歌をうたつていた。タクールはそれをお聞きになつて、ことのほかお喜びだ。「あの人に、いくらかお金をやつてくれ」とおっしゃつた。信者の一人が、心付けをやりに行つた。「やつたかい？」とタクールがお聞きになつたので一人が、「はい、〇〇さんが二パイサあげました」と答えた。

タクール「雇われて稼いだ金なんだろう——さんざ苦労したあげく手に入れた金だ。
それでも、四アナくらいはやるかと思つたが……」(訳註——四アナ＝十六パイサ)

〔電気装置——バグチー氏が描いた六本腕姿のチャイタニヤの絵——ラーマの絵——以前の話〕
——南神寺ドッキネンシヨルでの長い髪の毛の出家の話

若いナレンが道具を持ってきて、電気の性質をご覧にいらつていた。今日、その約束を実行するらしい。

午後二時。——タクールは信者たちにとりまかれて坐つていらつしやる。アトゥールが友だちの裁

判官を連れてきている。シクダルパラ出身の有名な画家、バグチーが来た。彼は何枚かの画をタクルに献上した。

タクルは大喜びで絵を見ていらつしやる。六本腕の神像の絵をごらんになって、そばの信者たちに、「ほーら、すごいねえ!」とおつしやつた。

信者に見せるために、アハリヤーが石にされた絵を、もう一度持つてくるように言われた。そこにラーマが描かれているのを見て、大そうお喜びになった。

バグチー氏は女のように髪を長くしている。タクルはそれを見ておつしやる。「ずーっと前に南ドラ神キネシヨル寺サンニヤシに出家が一人来たが、その人の髪は九ハト(4m)もあつたよ。ラーダー、ラーダーと言って称名していたつけ。飾りつ気のない人だった」

しばらくしてからナレンドラが歌をうたった。どれもこれも、離欲を歌ったものばかりだった。タクルが先ほど、強い離欲の話や出家の心得などについてお話したので、きっとナレンドラは大いに刺激されたのだろう。

ナレンドラの歌――

一、主よ ああ わが日々は空しく過ぎゆく

希望の道をただ、日も夜も見つめて――

.....

一八八七年四月九日に全訳あり

二、おお、我が奥深き支配者なる大実母^はよ
昼も夜もなく内に目ざめておられる

奥深き支配者——アンタルヤーミン

三、ああ、恵み深い主よ、わが魂の黒蜂が
あなたの蓮華の御足の甘い蜜に
もし浸りつづけていられぬならば
この人生に、何の幸福^{まこと}も見いだせない
.....

バジカン
讚神歌の喜び——三昧^{サマデー}の状態

夕方の五時半。サルカル先生が来て、タクールの脈を診^みてから薬をさしあげた。

今日はナレンドラの他にも、シャーム・ボース、ギリシユ、医師のドカリ先生、若いナレンヤラカー
ルなどが来ている。

病状の話がすみ、タクールが薬を飲み終わられるとサルカル先生は、「じゃあ、シャームさんと話

をなすつて下さい。私はこれで失礼します」と言った。

聖ラーマクリシュナともう一人の信者が、「歌を聞いていったらどうですか」とすすめた。

医師「あなた、またビヨンビヨン跳ねまわるんですか。興奮を抑えなくちゃいけませんよ」

医師は坐り直した。ナレンドラが甘美な声で歌いはじめた。タンプーラ(弦楽器)とムリダンガ(両面太鼓)の美しい伴奏も加わった。

一、無限にして この壮麗なる

大宇宙はただ 君の御手細工

無数の美しき 遠近の世界は

君あそび給う 喜びの家

千万の星は ダイヤと黄金の

きらめきわたる 君の首飾り

あまたの月と あまたの太陽は

終わりなくあざなう 君の腰帯

地の幸 海の幸 あふれる地球は

豊かなるかな 君の御蔵おんくら
くりかえし くりかえし 賞め讃えん
おお 自在シヅメ神よ 君の宇宙よ！

二、深い闇のなかに、大実母はよ

あなたの形なき美はきらめく

故にヨーギーたちは、山の洞穴に入りて禪定めいじょうす

果てなき闇に抱かれて、大涅槃の波に乗り

甘し芳かぐわしき平安は、長く絶え間なく流れゆく

終えわりなき時えんの姿をとり、黒玄の衣を着けて

三昧の聖所に、独坐するは誰か？

おお、大実母よ、無畏なる御足の蓮華より

愛は、電光のごとくかがやき

うるわしき靈顔、声高らかに笑い給う

い、興奮すると病氣びやうきに障さるから」
醫師は校長の肘ひじをつついて言った——「It is dangerous to him. (この歌はタクルのためによくな

聖ラーマクリシュナは校長にお聞きになる——「何て言ったんだい？」校長は、「先生が、あなた様が前バーヴァ・サーデー三昧になると体によくないので心配しておられるのです」と答えた。こう言っているうちに、もうタクルは恍惚こうこつとしてこれ、医師の顔をポーッと見ながら手を合わせてこうおっしゃる——「いや、いや、バーヴァにはならないよ？」そうおっしゃるうちにも、次第に深い三昧に入られてしまった。体は不動、まばたきもなさらぬ、もちろん無言のまま——。木の人形のように坐っていらっしやる！ 外界の意識は全くない！ 心も、知性も、我念も、すべて内に奥深く向けておられるのである。これはもう人間ではない。ナレンドラの甘美な声で歌はつづく——

おお！ これは何とたとえようもない

麗うるわしくも輝かんばせく顔容を見たことか！

今日、この賤ますしい家に、わがたましいの

御主人様がお入りあそばし

愛の泉がほとばしり、八方にあふれる

聞かせて下さい！ 愛いとしい御主人様

どんな財宝たからをあなたに賜たまりましょうか？

私のハートと命をおとり下さい、さあ、あなた

この上、何を差し上げられましょうか

さあ、私のすべてをおとり下さい
あなた、わが心の、わが魂の御主人様！

(歌)

ああ、恵み深い主よ、わが魂の黒蜂が
あなたの蓮華の御足の甘い蜜に
もし浸りつづけていられないなら
この人生に何の幸福も見出せない

あなたという至尊の宝玉を
あこがれ求めることもしないで
もしこの世に財宝の山を築いたとて
それが何の益になりましょう

あどけなく愛らしい幼な児の顔も
あなたの月の面差しの影が
もしそこに映っていないなら

私は見たいとは思いません

白金しろがねに輝く月の光も

私にとつては闇花と同じ

もしあなたの愛の月が

わが心の空に昇らないなら

貞節な妻の愛のなかにも

そこにああなたの愛の宝石が

もしはめこまれていないなら

まことの清さではありません

ああ、主よ、鋭い牙に裂かれたように

私はいつも悶え苦しむ

もし愚かな迷いに意こころみだれて

あなたを疑うそのたびごとに

このうえ何を申しましようか

主よ、わが胸にかがやく

あなたは私の心の宝玉

あなたはとこしえの歡喜よろこびの家

「貞節な妻の愛のなかにも」という文句を聞いたとき、医師の眼は涙でいっぱいになり——「ああ！
ああ！」と叫んだ。

ナレンドラは再び歌った——

その愛を、わがものとする日はいつか——

願いすべて満たされ、ハリの名呼べば涙あふれ

無明の闇に消えて、この世の獄おり舎は解壊こわれる

完智の玉に触れて、鉄の体は黄金となり

神のほか何も無き宇宙を見て、信の道にまろ転び伏す

徳行も義務もなく、身分血統の誇り消え

恐れ、恥、危惧も無く、悪癖、自慢の念去り

信者の足の塵を身に着けて、離欲の布袋を持ち

ヤムナー河の愛の水を、両手にすくって飲む

愛に酔いしれ、笑い、泣き、サッチターナンダの海に泳ぐ

永遠の歓喜に浸るその日は——ああ、いつの日か！

ジュニヤーナ ヴァレジュニヤーナ

智と覚智の識別、見ブラフマン

そのうちに、タクール、聖ラーマクリシュナは外部意識を取りもどされた。ナレンドラの歌もちやうど終わったところである。タクールはお話をはじめられた。学者も、愚者も、子供から成人した男女に至るまで、上下あらゆるクラスの人々を魅了するいつものお話——。

部屋中の人々はシーンとしている！そして皆、タクールのお顔を凝視している。あの難病はどこにいつてしまったのだろうか？ 咲いたばかりの蓮の花のような、いかにも楽しげなお顔——天上の光が中から輝き出している。さて、タクールは医者を名指して呼んでこうおっしゃる——「恥ずかしいなんて気持ちはおしまい。神さまの名をとなえるのがどうして恥ずかしい？ 恥ずかしい、憎らしい、恐ろしい——この三つがあっちゃいけない。『私はこれほどの人間なんだ。ハリ、ハリ言いながら踊るなんてことができるか？ 相当な人たちの耳に入ったら、私は何と言われるだろうか？ やれ、やれ、医者、ハリ、ハリ言っつて踊っているとは——』なんて言われたら恥ずかしい話だ！」こんな気持ちは捨てておしまいよ」

医師「そんなことありませんよ。人が何と言おうと、私はちつとも気になりません」

聖ラーマクリシュナ「いいや、すごくあるよ（一同笑う）。

「なあ、智と無智を超えると、あの御方のことがよくわかるようになるんだよ。いろんな智識があり過ぎるのは無智ということだ。学識を誇ることに、これも無智。一なる神が、ありとあらゆるものに宿つていなさる——これを確実に理解することがほんとうの智識だ。あの御方を特別親しく知ることを覚^{ウイジニヤナ}智といふんだ。足にトゲが刺さったとき、そのトゲを抜くためにもう一つのトゲを用意する。刺さったトゲを抜いた後でこの二つとも捨てる。はじめに無智のトゲを除くために智識のトゲをもつてこなけりやならぬ。用が済んだら智と無智を両方とも捨てなけりやいけないのだ。だってあの御方は、智と無智を超えたところにいなさるんだもの。ラクシュマナがラーマに言っただろう。『ラーマ！不思議なことがあるもの！これほど偉大な智者であるヴァシシュタ^{デーヴァ}様が、息子を亡くしたからといってこうまで嘆き悲しむとは！』するとラーマは言ったね。『弟よ、智のあるものは無智もある。一つのこと知るものはいろいろなことも知る。光の感じがあるものは闇の感じもある』ブラフマンは智と無智の彼方、罪と徳の彼方、正と不正の彼方、浄と不浄の彼方にある」

こうおっしゃって、聖ラーマクリシュナはラームプラサードの歌を口ずさまれた。

カーリー、カルパタルの樹の根元に

心よ、行つて生命^{いのち}の四つの実を摘もう

………
『浄』と『不浄』の二人の妻と

いっしょに神の部屋に寝るのはいつか

………

ダルマアダルマ
善と悪

二匹の雌山羊は

『無意味』の杭くに結びつけ

………

一八八三年十一月二十八日に全訳あり

『ブラフマンの性さがと相すがたは言葉と心では到達できない』

シャーム・ボース「二つのトゲを捨てたあとには、何があるのですか？」

聖ラーマクリシュナ「ニティヤ・シュツダ・ボツダ・ルーバム（サンスクリット）『常に清らかな意識の姿』。それをあなたにどうやってわからせたらいいのかねえ？ 誰かに『いいギー（バター）』はどんな味がする？」と聞かれたら、何て答えたらいいだろう？ せいぜい『いいギー（バター）』のような味がある』としか言えないじゃないかね？ 一人の少女が夫持ちの友だちに聞いた。「あなた、旦那さんとはどんな喜びがあるの？」すると、聞かれた女はこう答えた。「それはねえ、あなたも夫を持ってばちゃんとわかるようになりますよ。夫のないあなたには、今それをどうやって説明したらいいか、私はとてもできない」〔訳註、ギー——牛乳を発酵させて作ったバター。独特の香ばしい風味がある〕

が智慧だ。真の信仰者は、神よ、あなたが行為者、あなたがすべてをなさっておられる。私はただの道具。あなたへのさせる通りにする。すべては、あなたの財産、あなたのご威光、あなたの世界。家も家族もあなたのもの。私のものは何一つない。私は召使い。あなたの命令通りにするのが私の仕事。

本みたいなものを、ちよいと読みだすと人はとたんに高慢になる。カー・タクール(カーリークリシュナ・タゴール)と神様の話をしたことがあるがね。話の途中であの人は、『あ、そういうことは皆知っている』と言うんだ。わたしはこう言ってやったよ。『デリーに行った人が、私はデリーに行った、私はデリーに行ったら、とそこらじゅうに告げてまわるかね? ほんとの紳士が、私は紳士だ、私は紳士だ、と言うかね?』と」

シャーム・ボース「でも、彼(カー・タクール)はあなた様のことを大そう尊敬していらつしやいますよ」
聖ラーマクリシュナ「おや、おや、そりや光栄だね! 南神村のカーリー寺に掃除女が一人いるが、まあ頭の高いこと、高いこと! 宝石飾りを一つ二つ身につけているのが原因らしいんだ。道で一人、二人、その女を追い越して行ったら大声で、『ちよつと、どいてよ!』掃除婦でさえこの有様なんだから、ほかの連中のことは推して知るべしさ!」

シャーム・ボース「先生! 罪には罰がありますが、すべてのことは神がなさるといふのに、これはどういうことでしょう?」

聖ラーマクリシュナ「あんたは金貸しみたいな頭の人だね!」

ナレンドラ「金貸しのような頭というのはつまり、Calculating(打算的)だということですよ！」

聖ラーマクリシュナ「こら、このバカ息子、マンガーを食べないか！ 庭に何百本の木があるか、何千本の枝があるか、何万枚の葉っぱがついているか、そんな勘定が何の役に立つ？ お前はマンガーを食べに来たんだから食べて行くことだ。(シャーム・ボースに)——あんたはね、神様を探すために人間としてこの世に生まれてきたんだよ。神の蓮華の御足にどうすれば信仰を持てるようになるか、そのことに努力しなさい。あれやこれや考えてどうなると言うんだい？ (英語の発音で)フィロジョフィー(哲学)とかを議論していて、何か得るものがあるかね？ コップ一杯の酒で酔えるというのに、酒屋の店にどれだけ酒が置いてあるか、くわしく調査することがあんたにとって必要なかい？」

医師「まして神の酒は、Infinite(無限)ですからね！ これで終わりというところがないのです」

聖ラーマクリシュナ「シャーム・ボースに)——そして、神さまに代理権を委譲しなさいよ。あの御方に、みんなお願いしてしまうんだよ。申し分のない立派な人にみんなお願いしてしまえば、そのお方は悪いようにするはずがないだろ？ 罪にバチをあてるかどうかなんてことは、あの御方がお決めになることだ」

医師「神の意図は神のみぞ知る！ 人間があれこれ推量してもムダというものです。あの御方は我々の計算を超えたお方ですからね」

聖ラーマクリシュナ「シャーム・ボースに)——あんた方はそうなんだ。カルカッタの連中は何かといえば、『神は不公平だ。だって、ある人には幸福な環境を与え、ある人には惨めな状態に放っておく』

バカな奴らは、神さまも自分たちと同じような気持ちなんだろうと思っっているのさ！」

〔名譽を得ることが人生の目的か？〕

へムがよく南神寺トホキネシヨウに来てね。わたしに会いさえすればこんなことを言うんだ。『これは、これは、バツタチャリヤ先生マハシヤイ！ この世で一つだけ値打ちのあるものは——名譽じゃありませんか？ 神をつかむことが人生の目的という人たちは、ほんのわずかでしようが？』」（訳註、バツタチャリヤ——バツタチャリヤはバラモンの中でも聖職者など最高位のバラモンに与えられる称号で、ラーマクリシュナはこの階位に属していた）

粗大(肉体)、精妙(幽体)、原因、大原因

シャーム・ボース「よく言われている精妙スークシュマ・シャリーラ体(幽体)というものを、誰かハッキリ見せてくれる人がいますか？ 体からそれ(精妙体)が出て行くところを、誰か見せてくれる人がいるのですか？」

聖ラーマクリシュナ「神のほんとうの信者は、そんなことをする気には全くなれないよ。どこかのバカが認めようと認めまいと、ちつとも気にならないよ！ 誰か有名な人を感心させて、自分のところにつないでおこうなんて考えは、これっぽっちもありませんだ」

シャーム・ボース「アツチャ、粗大スクリラ・デーハな体や精妙スークシュマ・デーハな体はどういうふうに違うのですか？」

聖ラーマクリシュナ「五元素パンチャブータで出来ているのが粗大ストウラ・デーハな体だ。心とか、知性とか、我念、意識、こういうものでできているが精妙スークシュマ・シャリーラ体。至聖なるものの欲びを感じたり、それと楽しもうとする体が

原因カライナシヤリヲ体ダだ。タントラで言っているバガヴァティークダ体ダだ。この三つを超越トクセしているのが大原因オホクイカライナシヤリヲ。
 (超越トクセ)で、これは口では説明できない」

〔修行の必要——神への信仰だけが要かなめ〕

「聞いただけでどうなる？ 何か実行しろ。

お神酒おみき、お神酒おみきと口で称となえたところでもうにもなるまい？ それで酔えるかね？ お神酒おみきを体に塗ぬりたくつても酔いやしないだろう？ 少しでも飲まなけりやだめなんだよ。これは四十一番手の糸、これは四十番手の糸と、商人でもない人が見分けられるかい？ 糸商人をしている人は、どんな番手ナシバの糸だつて簡単に見分けられる！ だから、修行をしなければ、粗大スドクダ、精妙スウケンニョ、原因カライナ、大原因マヘカライナのちがいがみんなわかるようになる。そして神に祈るときは、あの御方の蓮華の御足に清い信仰を持てるように、それだけを祈ることだ。

アハリヤーを呪いから解いてやった後でラーマは、『何か願ねがい事があるなら叶かなえてあげよう』と言いつた。するとアハリヤーはこう言いつた。『ラーマ！ もし願ねがいを叶かなえてくれるのなら、この願ねがいを叶かなえて下さい。私はこのあと豚の仔に生まれても一向にかまいません。でも、ラーマ！ どうかあなたの蓮華の御足に、私の心がいつもおりますように——』

わたしはマーに、『ただ一つ、信仰を下ください』とだけ願ねがひしたよ。マーの蓮華の御足に花を供ともえて、手を合あわせてこう言いつたんだ——『マー、さあ、あなたの無智と智識チシキを持もつていつて、わたしに清い

信仰をおくれ。さあ、あなたの清浄と不浄を持って行って、わたしに清い信仰をおくれ。さあ、あなたの罪と徳を持って行って、わたしに清い信仰をおくれ。さあ、あなたの善と悪を持って行って、わたしに清い信仰をおくれ。さあ、あなたの正義と不正を持って行って、わたしに清い信仰をおくれ。

ダルマというのは、慈善行為のようない行いのことだ。ダルマを持つていると、アダルマもついてもわる。徳、徳、とかついでいると、罪もいっしょにくつついてくる。智識ジニヤーナを持つていると無智アジニヤーナもついでくる。同じように、浄と不浄、光と闇の関係も、一つのものゝ表と裏だ。それから、一という觀念があれば多もある。いいという感じを持たば、悪いという感じもある。

豚の肉を食べていても、神の蓮華の御足に信仰を持っていれば、その人は祝福された人だ。ハヴィシヤを食べていても、もし世間のことに執着していたら……」〔訳註、ハヴィシヤ——特別の米を炊いたご飯に、決められた種類の野菜を茹でたものを添えた食事で、神聖な食べ物とされている〕

医師「それは最低な人間ですよ！ ちよつと一言いわせて下さい。——ブツダは豚の肉を食べました。豚肉を食べてお腹を悪くしました！ その苦痛をまぎらすためにアヘンを常用しました。ニルヴァーナというのは何のことかわかりますか？ アヘンを飲んで中毒して外の意識がない状態——これがニルヴァーナといわれているものなんです！」

ブツダ様のニルヴァーナについてこんな説明を聞いた一同は、バカバカしさに笑い出してしまった。会話はつづいた。

在家と無私の行為——神智学

聖ラーマクリシユナ「(シャーム・ボースに)——世間で暮らしていながらいいことをする。それでかまわないよ。でも、神の蓮華の足にいつも心をおくようにして、無欲で何でも仕事をする事だ。ほら、この場合を考えてごらん。誰かが背中にオデキをでかしたとする。何でもないような顔して、人と普通に話したり仕事をしたりしているが、心は四六時中背中のオデキの方に向いている。それから、不貞な女のように暮らすことだ。心はいつもいい人の方に向いているが、そ知らぬ顔で家事万端やっている。(医師に)——わかるかい？」

医師「そういう経験がありませんから、わかりようがないですよ」

シャーム・ボース「わかつていくせに！」(一同笑う)

聖ラーマクリシユナ「アツハツハツハ……医者商売を長いことやっていらつしやるくせに！　そうでしょ？」(一同大笑)

シャーム・ボース「先生、神智協デオソフイ会のことをどう思われますか？」

聖ラーマクリシユナ「まあ一般的に言うと、弟子をたくさん集めようとするような連中は低い霊階の人間だ。それから霊能力とか神通力のようなものをひけらかしたり、欲しがったりする人も低い霊階だよ。ガンジス河を歩いて渡ってみたり、遠くの国の人が言ったことを聞きとって話してきかせるとか、そういう力。こういう人たちが神に純粹な信仰を持つのは、とても難しいことなんだよ」

シャーム・ボース「でも、彼等（神智协会会员）はヒンドゥー教を世界に再確認させようと努力しておりますよ」

聖ラーマクリシュナ「わたしは、その人たちのことをよく知らないんだよ」

シャーム・ボース「死後、個霊はどこへ行くか——月世界へ行ったり、様々の星の世界へ行ったり、そういうことを神智協会では教えてくれるのです」

聖ラーマクリシュナ「そういうこともあるか知らん。わたしの気持ちはどういう状態だか知ってるかい？ ハヌマーンに、ある人が、『今日はどんな日柄でしょうか？』と聞いたらハヌマーンはこう答えた。『私は日の吉凶も、星占いのことも何も知らない。ただ、ラーマのことばかり考えている』わたしもハヌマーンとまったく同じさ」

シャーム・ボース「彼等は、マハートマー（超人）の存在を断言しています。あなた様は信じますか？」
聖ラーマクリシュナ「わたしの言っていることをあなたが信じなさるなら、アルと言いましょ。でも、そういう話は、今はやめとこう。わたしの身体の具合がもつといいときに、また来て下さい。あなたの心が平安になるような方法が見つかると思うよ——もし、わたしを信じるならば、だが……。わたしはお金も受けとらないし、着るものも受けとらない。寄付のようなものも集めない。だから、こんなにワンサと人が押しかけてくるのさ！（一同大笑）」

（医師に）——こう言っても怒らないでくれよ。あんたはもうたくさんしたはずだ。——金のこと、名誉のこと、それから講演——こんどは、心を何日か神様にあずけてもらんよ。そして、ここにとき

どきおいで。神様の話を聞くと刺激されるから！」

まもなく、医師は暇を告げて席を立った。ちょうどそのとき、ギリシユ・チャンドラ・ゴーシユ氏
が来て、タクルの御足の塵をいただいてから坐った。医師は彼を見ると、内心のうれしさをかくし
きれぬ様子でまた坐りこんだ。

医師「私がいる間中、この人(ギリシユ)は来ないんだから！ 帰ろうとして立ち上がると部屋に入っ
てきてお坐りになる！」(一同爆笑)

ギリシユと医師は、Science Association (科学協会)の話をはじめた。

聖ラーマクリシユナ「いつか、そこへ連れていつてくれないか？」

医師「あそこへいらっしゃったら、あなたはすぐ気絶してしまいますよ——神の壮大な事業を見て

……」

聖ラーマクリシユナ「ホントかい？」

師の礼拝

グル・プージャ

医師「ギリシユに) 何をしてもかまわないが、but do not worship him as God.(でも、彼を神と
して拜んではいけません)。それが、こんなに善い人の頭を狂わせるようなことになるんじゃないで
すかね？」

ギリシユ「じゃ、どうするんですか、先生？ この世の海、この疑問だらけの海を渡らせて下さる

御方に対して、ほかにどんな態度を取れとおっしゃるのですか？ この方のウンコを、普通のウンコと同じように汚いと思いますか？」

医師「ウンコなど、別にどうということもありませんよ。私だってちつともイヤだと思いません。いつかだつて、ある商人の子が診察室に来たんですが、そこで排便してしまいましたね！ 部屋にいた人は皆、鼻を布でおおったんですよ！ 私は平気でその子のそばに三十分も坐っていました。鼻に布なんか当てませんでしたよ。掃除人が汚物桶を頭にのせてそばを通つても、鼻にハンカチなどあてがったりしません。私は掃除人と自分の間に差異を認めませんから、イヤがる気持ちが起きないのです。私が、この方の足のチリをつまむことができないとでもお思いか？——さあ、見て下さい」（と言つて、聖ラーマクリシュナの足のホコリをつまみ上げる）

ギリシュ「Angels（天使たち）は、このめでたき光景を祝福したまうべし」

医師「足の塵をとったのが、どうしてそんなに大したことなんですか！ 私は、誰のでも手にとつてごらんにいれる。——さあ、ください！ さあ、そちらの方！」（と言つて、その辺にいる人の足のチリをつまむ）

ナレンドラ「（医師に）——私たちはこの方を、神のような人だと思つてゐるのです。どういふことかわかりですか？ 植物界と動物界には、時として、そこにあるものが植物か動物か判別し難いような一つのポイントがあります。それと同様に、Man-world（人間界）とGod-world（神界）と、この二つの間にも、それが人間か神か正確に断言することができない一つの段階があるのです」

医師「おや、おや、神に関することは類推を許されませんよ」

ナレンドラ「僕は、God(神)とは言いません。God like man(神のような人)と言っているのです」

医師「そういう種類のことについては、できるだけ自分の感情を抑えなくてはいけないよ。口に出すのはよくない。——私の気持ちは、誰にもわかってもらえないのです。My best friends(よい友だち)でさえ、私のことをガンコで冷酷な人間だと思っているんですからねえ。あなた方は私を靴で蹴とばして、この部屋から叩き出したい気持ちなんですよ！」

聖ラーマクリシュナ「(医師に) トンデモナイ！ みんなあなたのこと、大好きなんだよ！ あん

たがここへ来るといふんで、一張羅いちじょうらを着こんで集まってきたんだよ」

ギリシユ「Everyone has the greatest respect for you. (皆が、あなたを最高に敬っております)」

医師「私の息子、私の家内でさえ、私のことを思いやりのない男だと——。ええ、無理もないのです。私は、自分の感情を表にあらわしませんから、そのせいなのですが——」

ギリシユ「じゃあ、先生！ あなたのことを理解してもらえないんだったら—— at least out of pity for your friends (せめて同情心からでも、友人に対しては)ご自分の心の扉を開いたらいかがでしょう——それがいいと思いますよ」

医師「何と言えはいいかなあ！ あなた方よりもっと私の feeling(感情)は、worked up(高ぶりやすい)んだがなあ。(ナレンドラに) I shed tears in solitude——(私は、たった一人で泣くことがあります)」

〔偉大なる魂と衆生の罪を受けること——アヴァターラたちとナレンドラ〕

医師「〔聖ラーマクリシュナに〕——いいですか、あなたは靈的興奮状態になると人の体に足をのせるが、あれはよくありませんよ！」

聖ラーマクリシュナ「わたしは何もわからないんだよ。誰の体に足をのつけているものやら……」

医師「あれはよくない、ということはわかっているのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「わたしの法悦境がどんなものか、どうやったら説明できるだろうね。そこから下りてきた後でわたしが思うのは、病氣の原因はあのせいじゃないか、ということさ！ 神さまの想いに浸ると、わたしは氣狂いのようになる。氣狂いみたいな状態ですることだから、どうしようもないだろう？」

医師「この方は、私の言うことをお認めになった。He expresses regret for what he does. (自分の行いに、非を認めていらっしゃる)。この方はそれが、sifted (よくないこと)だと感じていらっしゃる」
聖ラーマクリシュナ「(ナレンドラに)——お前はホントに賢いんだから、お前、お言いよ。この人に分からせておやりよ」

ギリシュ「(医師に)——先生！ あなたは誤解していらっしゃる。この方は、そのこと(他人の体に足をのせること)を後悔なんかしていらっしゃいませんよ。この方の体は清浄そのもので、罪のシミ一つないのですから——。衆生に祝福を与えるために、体にお触りになるのです。彼らの罪をご自分で引

き受けたために、病気になるられたのかも知れないとさえ、時々思っておられるのですよ。あなたが、もし腹痛になったとき、夜遅くまで起きていて読書していたことを後悔なさいませんか？　じゃ、夜遅くまで勉強したことが悪いことなんでしょうか？　そりゃあ病気になるったら後悔するかも知れない。しかし、それだからといって、人びとに良かれと祝福して体に触ったことを、悪かつたなぞと思つてはいらっしゃいませんよ！」

医師「当惑して、ギリシユに向かつて）——どうも一本やられたらしい。さあ、足のチリを下さい。（と言つて、ギリシユの足のホコリをつまむ）

（ナレンドラに向かつて）——誰が何と言おうと、his intellectual power（ギリシユの知性）を認めなけりや……」

ナレンドラ「（医師に）——それから、もう一つの事実を直視して下さい。一つの Scientific discovery（科学的発見）のために、あなたはご自分の一生を捧げてこられた。体の健康などには目もくれずにね。しかし、神を知ることこそ grandest of all sciences（科学の神髄）であり、そのためにこの方は health risk（生命の危機）さえ、気にもされなかつたのではないでしようか？」

医師「religious reformer（宗教改革者）になつたほどの人、つまり、Jesus（イエス）、チャイタニヤ、ブツダ、モハメッドなどはみな、我執高慢のかたまりです——自分の言うことだけが正しいのだ！　と言うのです。何たることか！」

ギリシユ「（医師に）——先生、あなたも同罪ですよ！　彼等の我執高慢を批難なさるが、あなたも

彼らと同じことをしているとは思いませんか」

医師はついに黙ってしまった。

ナレンドラ「(医師に)—— We offer to him Worship bordering on Divine Worship. (私たちは彼に、神への礼拝とはほぼ同様の礼拝を捧げます)」

タクール、聖ラーマクリシュナは、大喜びで子供のように笑っておられた。